



「9歳の節」と発達保障

詩や作文にみる9歳頃の子どもの発達と指導

川地 亜弥子

要旨 小学校中学年頃について、戦後初期には、池田太郎が発達の重要な時期として論考を発表していた。1930年代には、発達の節として注目した上での指導ではないものの、中学年で学力不振改善のための再指導を行う教師や、教えたい・役に立ちたい気持ちに根ざした指導を行う教師がいた。現代の子どもたちの詩や作文、教育実践の分析では、中学年頃に、したこと・見たことだけではなく自分の思いの動きを見つめて書くこと、自他の思いの違いについても明確に書くことを示した。ただし、これは読む相手、集団との関係が大きく変わる。集団の中で安心して思いを出せ、丁寧に理解される経験を重ねることで、相違による排除ではなく、理由をふまえて知恵を出し、方法を考え、共に活動を進めることができる。個人と集団の発達を保障する指導の役割は大きい。

キーワード 9歳の節、作文、綴方、集団

はじめに

可逆操作の高次化における階層一段階理論（以下、階層一段階理論と略）において、小学校中学年頃は、発達の飛躍的移行期にあたる。生後第3の発達の階層から生後第4の階層への移行期であるだけではない。人間発達の第2大階層（乳児期前半、同後半、幼児・学童初期という3つの発達の階層よりなる）から、人間発達の第3大階層への移行期でもある（田中、2003、p.8の表参照）。階層一段階理論において、大階層間の移行がなされるのは、出生時と、小学校中学年頃のみであり、この頃は、出生に相当するような大きな変化に直面する時期ともいえる。

階層一段階理論を提唱した田中は、「各発達の大階層の第1の発達の階層における非科学的・非人道的なもののもちこみの防止はとりわけ重視さ

れなければならない」（田中、2003、p.9）と指摘している。これはどの階層でも重要なことだが、とりわけ乳児期前半の階層と、小学校中学年頃から22歳頃までの階層において、発達保障に格段の努力が求められることを示している。

しかし、生後第2大階層の第1の階層について、乳児期前半のように細心の注意を払って発達が保障されてきただろうか。特に、田中が「発達保障には、個人、集団と組織、社会体制と国際社会の3つの系に平和と非暴力、民主主義を徹底していく」ことが重要とも指摘していること（田中、2003、p.9）、小学校中学年頃から始まる階層における新しい交流の手段として書き言葉を挙げている（田中、1987、pp.144-145）ことを考えれば、この階層において、他者と生活をともにしながら平和と非暴力、民主主義について学ぶこと、そのような世界を広げ他者と交流していくための手段として書き言葉が位置づいていることは重要である。苛烈な受験競争を勝ち抜くために、的確に情報をまとめてよりよい「評価」を得られる書き方を学ばせることでよいのか。それとも、単純では

ない自分の思いや他者の願いについて書けるような条件を整え、書かれた作品を読み深めることで、一人の子どもも排除されず、みんなの願いへと高め、実現する経験を重視していくのか。

本稿では、戦前における9・10歳頃への注目と指導について言及したのちに、現代の子どもたちが書いた日常生活についての詩や作文を通じて、この時期の発達の特徴をとらえ、指導の在り方について考察を加える。

1 9・10歳への注目

9・10歳頃は、人間発達の質的転換期として指摘されてきた。教科学習に関する困難だけでなく、自我、友達関係や社会性、計画性に注目して論じたものもある（川地、2019）。

節・壁・峠のように端的な言葉でこの時期の困難さを最初に指摘したのは、萩原浅五郎だと言われてきた。彼は、聴覚障害児の学力の「9歳レベルの峠」（萩原、1964、p.3）について教育の課題として指摘した。その前年には「小学校四五年生の相応学力が上限のように思われる」（萩原、1963、p.5）とも言及している。

中村隆一は、池田太郎がこれより早く、1946年2月に「3・4年生の問題」について執筆していることを発見した。中村は「（池田が）単に3・4年生に教室で経験する目覚ましい変化だけではなく、教育に帰することのできない内発性に注目し、それを発達の段階の変化としてとらえようとしている」（中村、2019、p.7）と指摘している。

池田は1932～38年に学級を持ちあがった経験や、その他の教師の話を総合して、3・4年生の時期は学習の遅れを取り戻すためにも、身体技術の獲得においても、クラスの仲間づくりにおいても重要な時期であると指摘している¹⁾。

池田の指摘から、この時期の重要性は戦前から認識されていたのではないかと推測できる。ただし、これが指導上重要な時期だと認識されていたのか、それとも「遅進児」「劣等児」はいてもやむを得ないとの認識だったのかは、教

師によっても異なったようだ。

加藤周四郎は自伝において、1930年に小学校の職員会議で、教頭が「農村の児童には読み書きだけは」という発言をした後に、他の教師から「僻村であれば、父兄の学校への協力などは望めない」こと、「3日も4日もつづけてやすんでしまおうし、帳面も鉛筆もない」ことなどが「劣等児童の滑稽な逸話」として繰り返されたことに業を煮やしたとのエピソードを記述している。加藤は、「学力低下の子供をどうするかは、笑いごとどころではない私たちの大きな問題」「何故こういう現象がつづいているかということ」「それをどんな具体的方法で救うか」ということだと主張し、会議が「白けてしまった」と記している（加藤、1979、pp.40-41）。結局「第3学年級を指定して、来年度1箇年間放課後の特別指導を行って、4年生になる前までに学力の平均化を計る計画」を実施することとし、加藤が担当者となった。

彼はその後、学力不振の子どもたちに注目した論考を発表した（加藤、1931）。その原因を貧困に求める一方、指導による克服を目指し、新設の高等小学校（小学校卒業後に進学する学校）へ転出した。そこでも学力実態の調査をした。1937年度に高等小学校1年女家事組58名を担任した際には、算術四則10問テストを実施し、4割近くが九九の不正確や割り算をできないこと等確かめた（加藤、1939、p.16）。

1930年代に複数回、中学年を持ちあがり担任した山形の国分一太郎は、算数において生活の関心から展開し、みんなで考え、生活へと生かす指導を行った（川地、2006、pp.28-29）。算数が苦手な子どもを放っておかず、たとえばその子が飼っている兎が子を産んで、雌3匹、雄2匹が売れたらいくらの収入になるのか、級友たちと議論しながら、生活と論理的な思考、四則計算を結びつけて理解を深める指導を行った。

書き言葉についてはどうだっただろうか。これも、文意不明、小学校卒業時に手紙も書けないとの指摘がなされていた。国分は、1933年度、3年生49人を担任した際に、「『教えてくれる』綴方」